

シメオンの賛歌

ルカの福音書 2 章 25-35 節

はじめに

アドベントも三週目になりました。今年のアドベントの説教では、クリスマスに纏わる「賛美」から学んでいます。一週目は、「マグニフィカート」と呼ばれる「マリアの賛歌」、二週目は、「ベネディクトゥス」と呼ばれる「ザカリヤの賛歌」、そして三週目の今日は、「ヌンク・ディミッティス」と呼ばれる「シメオンの賛歌」から学びたいと思います。

なぜ「シメオンの賛歌」が「ヌンク・ディミッティス」と呼ばれるかということ、29 節に「**主よ。今こそあなたは、おことばどおり、しもべを安らかに去らせてくださいます**」とありますが、ここにある「今こそ、去らせてくださいます」という言葉のラテン語が、「ヌンク・ディミッティス」という言葉だからです。

1. シメオンと聖霊

最初に、「シメオン」という人がどんな人なのかを見ていきたいと思います。25-27 節を見てみましょう。「**そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい、敬虔な人で、イスラエルが慰められることを待ち望んでいた。また、聖霊が彼の上におられた。そして、主のキリストを見るまでは決して死を見ることはない、聖霊によって告げられていた。シメオンが御霊に導かれて宮に入ると、律法の慣習を守るために、両親が幼子イエスを連れて入って来た**」。

シメオンは、エルサレムにいた人で、正しく、敬虔な人でした。この「正しく、敬虔な人」というのは、信仰深く、律法を忠実に守る人という意味です。彼は、「イスラエルが慰められる」のを待ち望んでいました。「イスラエルが慰められる」とは、「イスラエルが救われる」ことです。当時の人たちは、「キリスト」が現れて、ローマ帝国の支配から「イスラエルが救われる」ことを待ち望んでいたのです。シメオンも、その「イスラエルの救い」を待ち望んでいる一人でした。

しかしシメオンは、他の人とは違って、特別に聖霊によって告げられていることがありました。それは、「主のキリストを見るまでは決して死を見ることはない」ということでした。つまり、キリストを見るまでは決して死なないという約束でした。ここから、シメオンは老人であったのではないかと一般的に考えられています。もし彼が老人であったとすれば、何十年もキリストを待ち望みながら生きていたと言えます。

シメオンの特徴は、「聖霊が彼の上におられた」ことです。25-27 節の間に、三度も「聖霊」または「御霊」という言葉が出てきます。シメオンは、聖霊が共におられたので、正しく、敬虔に歩むことができました。またシメオンは、聖霊に語りかけられ、御言葉の約束を

与えられました。またシメオンは、聖霊に導かれて、幼子であったイエス様と出会うことができました。

私たちは、シメオンに働く聖霊を通して、聖霊とはどういう方かを知ることができます。聖霊は、私たちが正しい生活、敬虔な生活へと導いてくださるのです。聖霊は、私たちが御言葉を守り行う力を与えてくださるのです。また聖霊は、御言葉を通して、私たちに語りかけてくださいます。聖書のない時代は、聖霊は直接人々に語りかけられました。しかし聖書が書かれた現代では、聖霊は聖書を通して私たちに語りかけてくださいます。そして、聖書の御言葉を通して、私たちに多くの約束を与えてくださっています。また聖霊は、私たちがイエス様のもとへと導いてくださいます。聖霊が私たちの心を開き、信仰を与えてくださることによって、私たちはイエス様のもとに行くことができるのです。

2. シメオンの賛歌

さて、聖霊に満たされていたシメオンは、エルサレムの神殿に入って来た幼子のイエス様を見て、思わず腕に抱き、神様を賛美するのです。それが、「ヌンク・ディミッティス」「シメオンの賛歌」です。29-32 節を見てみましょう。「**主よ。今こそあなたは、おことばどおり、しもべを安らかに去らせてくださいます。私の目があなたの御救いを見たからです。あなたが万民の前に備えられた救いを。異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの栄光を。**」

シメオンは、幼子のイエス様を見て、「あなたの御救いを見た」と言います。そして「主よ。今こそあなたは、おことばどおり、しもべを安らかに去らせてくださいます」と言っていますから、聖霊によって約束されたことが実現した、この幼子こそ「キリスト」だと分かったのです。

そもそも、なぜシメオンは、幼子のイエス様を見て、「救い主」「キリスト」だと分かったのでしょうか。腕に抱いている幼子は、ただの可愛い赤ちゃんです。そこには、イスラエルをローマ帝国から救うような力強さはありません。しかし彼には、イエス様こそ「救い主」「キリスト」だと分かったのです。それはおそらく、彼が聖霊に満たされていたからではないのでしょうか。使徒パウロは、こう言っています。「**聖霊によるのであれば、だれも『イエスは主です』と言うことはできません」(1コリント 12:3)**。聖霊によらなければ、誰もイエス様が神であること、救い主であることが分からないのです。聖霊によって心を開いてもらわなければ、誰も、あの二千年前に十字架で殺されたナザレのイエスが、神であり、「救い主」「キリスト」であることが分からないのです。

シメオンは、聖霊によって御言葉を守り行う力を与えられ、聖霊によって御言葉の約束が与えられ、聖霊によってイエス様を神、救い主と信じる信仰が与えられたのです。シメオンは言います。「主よ。今こそあなたは、おことばどおり、しもべを安らかに去らせてくださいます」。イエス様に出会ったシメオンは、今こそ安らかにこの世を去れる、安らかに死ぬると言うのです。イエス様を信じ、イエス様に出会った人は、安らかに死を迎えることができるのです。黙示録 14：13 には、こうあります。「**今から後、主にあつて死ぬ死者は幸いで**

**ある「その人たちは、その労苦から解放されて安らぐことができる。彼らの行いが、彼らとともに
ついて行くからである」。**イエス様を信じる人にとって、死は安らかであり、幸いでさえある
のです。なぜなら、地上のあらゆる労苦から、つまり罪によってもたらされたあらゆる苦し
みや悲しみから解放されるからです。そして地上での行いに対する報いが与えられるから
です。イエス様によって、ただの恐怖でしかなかった死が、安らかなもの、幸いなもの、ま
た天国への入口となるのです。

どうか私たちも、「主のキリストを見るまでは決して死を見ることはない」とあるように、
「イエス様を信じるまでは、決して死ねない」あるいは「死ぬまでに、必ずイエス様を信じ
る」そういう思いを持っていただきたいと思います。私たちは遅かれ早かれ、必ず死を迎え
ます。その死を安らかに迎えるか、それとも恐れて迎えるか、それはイエス様を信じか否か
に懸かっています。私たちは、家族の救いを祈っておられるでしょう。ぜひ家族が、「死ぬ
までに、必ずイエス様に出会うように、イエス様を信じる」ように祈っていきましょう。家
族が、安らかに死を迎えられるように、幸いな死を迎えられるように祈っていきましょう。

「シメオンの賛歌」は、イエス様によってもたらされる救いを、「あなたが万民の前に備
えられた救い」「異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの栄光」と言っています。シメ
オンは、「イスラエルの救い」を待ち望んでいました。しかしイエス様を腕に抱き、目の前
に見た時、思わず「あなたが万民の前に備えられた救い」「異邦人を照らす啓示の光」と言
ったのです。つまりイエス様は、イスラエルを救うだけではない、異邦人も、すべての人を
救う救い主であると言ったのです。確かにイエス様は、「御民イスラエルの栄光」です。イ
エス様は、まずイスラエルの民に福音を説きました。そしてイスラエルの民から十二人の使
徒たちを選び、イエス様の死と復活と昇天の後、彼らを異邦人、全世界へと遣わされました。
こうしてイエス様は、イスラエルだけではなく、異邦人の、すべての人の救い主となられた
のです。

3. シメオンの預言

今日の聖書箇所には、「シメオンの賛歌」だけでなく、シメオンが母マリアに語った預言
も書かれています。33-35 節を見てください。「**父と母は、幼子について語られる様々なこ
とに驚いた。シメオンは両親を祝福し、母マリアに言った。『ご覧なさい。この子は、イスラエルの多く
の人が倒れたり立ち上がったたりするために定められ、また、人々の反対にあうしるしとして定められ
ています。あなた自身の心さえも、剣が刺し貫くことになります。それは多くの人の心のうちの思いが、
あらわになるためです』**」。

「シメオンの賛歌」を聞いて、ヨセフとマリアは驚きます。それは、この幼子がイスラ
エルだけでなく、異邦人も、すべての救い主となると聞いたからです。彼らはこれまで、この
幼子がイスラエルを救うことになるとは聞いていました。しかし、異邦人も、すべての人を
救うことになるということは、シメオンを通して初めて聞いたことであつたのです。それゆ
え彼らは、驚いたのです。

シメオンは、ヨセフとマリアを祝福します。しかしその後シメオンは、母のマリアにだけ語りかけます。しかもその内容は、祝福とは思えないような辛い内容でした。なぜなら、この幼子を通して、イスラエルの多くの人々は倒れ、反対し、心のうちの思いをあらわにしていくからです。中には、この幼子を通して立ち上がる人もいます。しかし多くの人々は、この幼子につまずき、反対し、怒りと憎しみをもつようになるのです。だからこそシメオンは、マリアに「あなた自身の心さえも、剣が刺し貫くことになります」と言っています。マリアは、この幼子によって、心がえぐられるような苦しみを味わうようになると言われるのです。

イエス様はまず「御民イスラエルの栄光」として、イスラエルを救うために来られました。しかしイスラエルの多くの人々は、イエス様を受け入れなかったのです。特に当時の宗教指導者たちは、強い妬みを持ち、殺意に燃え、イエス様を十字架につけて殺してしまったのです。母マリアは、わが子が十字架で殺される姿を見て、心をえぐられるような経験をするのです。

シメオンは、イエス様によって、「多くの人々の心のうちの思いがあらわになる」と言いましたが、あの十字架こそ、人の心のうちの思いがあらわになった出来事と言えるのではないのでしょうか。もっと言えば、人の罪が明らかになった出来事と言えるのではないのでしょうか。十字架を見るまで、私たち人間の罪の重さがどれくらいのものなのか、分かりませんでした。しかし十字架を通して、それが明らかにされたのです。私たち人間の罪の重さは、神のひとり子が十字架の死を通して償わなければならないほど、大きなものであるということが明らかにされたのです。私たち人間の罪は、神のひとり子が十字架で死ななければ、決して解決できない、どうしようもないものだということが明らかにされたのです。

私たち人間の罪は、また私たちの心は、自分で償うことも、変えることも、解決することもできないのです。そんなに甘いものではないのです。神のひとり子でなければ、償うことも、変えることも、解決することもできないものなのです。

おわりに

イスラエルの多くの人々は、イエス様につまずき、反対しました。しかし中には、シメオンのようにイエス様を通して立ち上がった人もいます。私たちは、イエス様を通して、倒れることもできるし、立ち上がることもできるのです。ただ私たちは、どちらかを選ばなければなりません。イエス様を信じて立ち上がるか、それともイエス様を否定して倒れるか。またイエス様を信じて安らかな死を迎えるか、それともイエス様を否定して恐怖の中で死を迎えるか。

イエス様は、私たちの罪を背負って十字架に架かり、私たちの罪を償われました。私たちの罪の問題は、決して自分では解決できません。私たちは、神様の前に、自分で罪を償うことはできません。私たちにできることは、ただイエス様の償いに信頼することしかありません。私たちは、罪の問題さえ解決すれば、安らかに死を迎えることができるのです。イエス様を信じる人には、聖霊が共にいてくださいます。聖霊がいつも、聖書を通して私たちに語りかけてくださいます。そして御言葉を守り行う力をいつも与えてくださるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちの心は、罪に満ちていて、自分で解決することができません。死に備えて、自分で償うこともできません。神のひとり子であるイエス様の十字架の死をもってしか、解決できないほど、私たちの心と罪は癒しがたいものです。どうか聖霊なる神様、私たちをイエス様のもとへと導いてください。イエス様への信仰を強めてください。そして日々、聖書の御言葉をもちに私たちに語りかけ、御言葉を守り行う力を与えて、私たちの人生を導いてください。この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。